

日本文学史
早わかり

丸谷才一



日本文学史早わかり

一九七八年四月二十日 第一刷発行

著者 丸谷才一

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二二 郵便番号一二二
電話 東京(〇三)九四五一一二一 (大代表)
振替 東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 八五〇円

©Seichi Maruya 1978 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替わります。

目

次

I

日本文学史早わかり

II

香具山から最上川へ

歌道の盛り

雪の夕ぐれ

花

9

83

96

111

134

Ⅲ

趣向について

143

ある花柳小説

151

文学事典の項目二つ

155

風俗小説

155

戯作

158

夷齋おとしばなし

164

あとがき

171

初出一覧

178

付表

装 幀／和田 誠

カバー画／サム・フランシス

日本文学史早わかり

日本文学史早わかり

I

「人間は道具を作る動物だ」といふのは、サミュエル・ジョンソンが引用したせいで有名になったフランクリンの台詞せうごだが、いかにもこの二人にふさはしい、といふよりもむしろ彼らの時代にふさはしい人間論の要約だらう。空漠と思案することをギリシア人が尊んだのに対し、十八世紀人はものを作ることをもつて人間の特性とした。事実、ワットが蒸気機関を改良し、ウェッジウッドが陶器を焼いたやうに、フランクリンは金言集つきの暦、遠近視両用眼鏡、高い書架の本を取るための道具、電気実験用の瓶をこしらへ、そしてサミュエル・ジョンソンは英語辞典とシェイクスピア全集を編んだのである。アメリカの政治家兼印刷業者兼科学者と、イギリスの辞書編纂者兼詩人兼評論家とは、協力して、あるいは分業して、ホモ・フラ・ビブル工作的人間といふ

近代的人間概念を普及させた。

フランクリン・ジョンソンふうの道具の重視は、人間の生活について具体的に考へようとする場合、すこぶる有用である。われわれは生活の局面のそれぞれに応じて異なる道具を用ゐるから（たとへば、睡眠には枕と蒲団、料理には包丁と鍋、歩行のためには靴、その靴を履くためには靴べら）、逆に、それぞれの道具を検討することは、それを用ゐる生活の局面について精細に考へるのに役立つだらう。たとへば枕と蒲団について詳しく調べることに睡眠論にとつて貴重であるやうに。

このことは文学論の場合にも言ひ得る。もちろん文学を作るための道具（たとへば筆と墨、たとへばタイプライター）について考へることはあまり役に立ちさうもないけれど、見方を改めて、文学を楽しむための道具について研究するならば、かなり示唆に富むことになりさうだ。すなはち文学の道具からの反射によつて文学それ自体が照明される見込みはずいぶん大きい。

それなら文学の道具とは何か。言ふまでもなく本である。これだけでは簡単すぎていくら何でも愛想がないから、吉田健一の『文学の楽しみ』から引用すれば、「文学といふのは、要するに、本のことである。その他に新聞や雑誌に載つたものは文学の切れ端と見て構はなくて、その証拠に、文学の切れ端と呼べる程度にその中で読み甲斐があるものは後に一冊の本に纏められ、この方が一層何か読んだ感じがする。」しかしこれではあまりにも茫漠としてゐて、焦

点がきまらないなら、話を進める都合上、文学の中心部は形式別にすればいい、何だらうかと考へてみよう。それはもちろん詩である。戯曲でも批評でも小説でもない。とすれば、詩を読むための本、すなはち詩集こそ文学の道具の代表といふことになるわけだが、ついでに話をもうすこししぼることにして、その詩集のなかでもとりわけ大事なのは何か。詞華集にほかならない。

普通われわれは詩集と聞けばただちに個人詩集を連想する。たとへば『月に吠える』とか、『春の岬』とか。あるいは『白秋詩抄』とか、『西脇順三郎全詩集』とか。広義の詩である短歌・俳句についても事情はまったく変らないだらう。つまり、『現代詩選』、『戦後短歌集』、『昭和俳句集』といふやうな本は（以上三つの題はいづれも架空のもの）、詩集といふ概念とわりあひゆるやかにしか結びつかない。われわれの社会では、詩集といふ言葉はとりあへず個人詩集を意味する。それが現代日本文学の久しきにわたる約束事なのだ。

それゆゑ、これはすこぶる意外なことかもしれないけれど、本来、詩集とは詞華集、数多くの詩人の作品から編者がよりすぐった傑作選を指すものであつた。たとへば『詩経』がさうである。『萬葉集』がさうである。『ギリシア詞華集』に至つてはなほさらさうである。詩集の標準の型は総集（詞華集）で、別集（個人詩集）は極めて特殊な例外にすぎなかつた。人々はみな前者によつて詩を読んだので、後者に触れたことのある詩の愛好者は滅多にゐないくらゐだつたらう。そして、今あげた三つの詞華集がみな遠い昔のものであるとするならば、現代イギ

リスの詩的狀況を例に引くとうか。

黒人の少年がジンを持つて来ると、ウィルソンはできるだけゆつくりと飲んだ。といふのは、暑くてむさくるしい部屋に帰れば、小説でも読むしかなかったからだ。それとも、詩でも読むか。ウィルソンは詩が好きだが、ただし薬のやうにこつそりのみくだすのだ。どこへゆくときも『ゴールドデン・トレジャリー』を携へてゐて、夜になつてからすこしづつ服用する——一つまみのロングフェロウ、一つまみのマコウリー、一つまみのマンガン。「語りつづけてくれ、天才を浪費し、友人に裏切られ、恋に偽られた物語を……」。彼の趣味はロマンチックだつた。

(グレアム・グリーン『事件の核心』)

『事件の核心』の舞台は第二次大戦中のアフリカである。だがグリーンを描かうとしてゐるのは現代イギリスの風俗で、その風俗のなかには、上流階級による支配やパブリック・スクールやクリケットや一夫一婦制と共に、どこへゆくときも携へる詞華集もまた含まれてゐた。もちろん『ゴールドデン・トレジャリー』（題全体をきちんと訳せば『英語で書かれた最上の唄と抒情詩の黄金の宝庫』）は十九世紀後半に成つたもので、ヴィクトリア朝ふうの甘つたるくとかびくさい趣味で貫かれてゐる。エリオット以後、あるいはクイラー・クーチの『オクスフォ

ード英詩選』以後にそれを愛読するのはいささか滑稽だらうし、その時代おくれを誇張して笑ふことは風俗小説の作家にとつて仕事の一部分になるにちがひないが、しかしこれとても、ウィルソンの詞華集好きが現代イギリス人のなかでまったく例外的な現象であるならば、つまり彼が途方もない変り者であるせいで詞華集を読むのならば、このデイトイルは読者に働きかける力をさほど持たない。ところが詞華集は現代イギリスの一般的な嗜好なのである。

そのことを證する材料は数多い。たとへば、『ゴールデン・トレジャリー』が一世を風靡したあとで、一九〇〇年にクイラー・クーチの『オクスフォード英詩選』が編まれ、その後四十年間に五十万部が売れた。しかもそれと並んで、『ゴールデン・トレジャリー』がさまざまな形で版を重ね、さらにその増補版が、一九二六年にはロレンス・ビニオン（マクミラン書店）、五六年にはオクスフォードの世界古典文庫、五七年にはエヴリマン文庫、五九年にはC・デイル・ルイス（コリンズ書店）によつてといふ具合に作られた。そしてクイラー・クーチの詞華集のあとを襲つて、七二年にはヘレン・ガードナーの『新オクスフォード英詩選』が出た。新旧二つの『英詩選』に限らず、オクスフォード大学出版部の詞華集に対する熱心さは驚くべきもので、『十六世紀詩選』にはじまり『二十世紀詩選』に至る世紀別のもの、『ヴィクトリア朝詩選』や『イギリス神秘詩選』、イエイツ編の『現代詩選』、オウデン編の『ライト・ヴァース選』、それにアイルランドの詩、ウェイルズの詩、スコットランドの詩などのいはば地方別のもの、さらに諸外国の国別の詩集など、その種類はおびただしい。オクスフォード大学出版部

と並んで詞華集をよく出してゐるのはフェイバー書店で、この社の場合は『フェイバー恋愛詩集』や『フェイバー大衆詩集』、さてはバロディーの傑作集にまで及ぶことになるし、さうさう、忘れてはいけない、例のペンギン文庫には正統的なものから突飛な趣向のものに至るまで、数多くの詞華集がはいつてゐる。そして種類こそこの三つの出版社ほど多くはないにしても、他の書店もみなこの手の本を出してゐて、新しい詞華集が出ればそれはたいい（質のよしあしに依じて大小さまざまの）書評の対象となる。書肆の側や書評者の側のかういふ熱意の前提として、読者の側の需要があることは言ふまでもなからう。

現代イギリス人の詞華集好きは彼らが国をあげてクロス・ワード・パズルに凝つてゐるからだといふ冗談がある。ロジエの同義語辞典がよく売れるのはクロス・ワード・パズルのおかげといふ噂はかなり信用できるらしいから、詞華集とあの関つぶしの関係も無縁とは言へないかもしれないぬ。だが、問題はむしろそのさきにあるので、つまり、パズルの出題者たちがしきりに詩をあしらふ形で出題するのはなぜなのか、といふことが大事だらう。これについては、そのほうがいろいろ綾がつけやすく、しやれたパズルが作りやすいといふことはあるにしても、しかしその事情のもつと底には、イギリス人みんなが詩を好むといふ条件が横たはつてゐるにちがひない。詩を口ずさむことが共通の趣味であり、有名な詩のさばりのところは共通の知識だからこそ、それを踏まへたパズルの出題が可能なのである。

詩人たち、および詩人志望の若者たちと娘たち、学者たちないし批評家たち、および学者な

いし批評家志望の若者たちと娘たちならばともかく、さうではない普通の読者が詩を読まうとする場合、いはゆる個人詩集が二の次になるのは自然なことだ。彼らがまづ読むのは詞華集で、それによつて特に気に入つた詩人を発見したとき、たとへばディラン・トマス、たとへばダンの、詩集を開くことになる。そしておそらく、奮発して買ひ込んだ『ダン全詩集』のページをめくりながら、読者は十中八九まで、おもしろくない詩、大したことのない詩、ピンと来ない詩がつづくのに落胆し、やはり詩は詞華集で読むのがいいといふ感想をいただくのではなからうか。さう、詩は詞華集で読むに限る。まさしくその通りなので、詞華集で読むことにすれば、何と言つてもいちおう信用できる編者が選んだものだから、駄作や凡作は読まなくてすむ。時間を浪費せずに詩を楽しむことができる。これを別の言ひ方で言へば、かけた時間にふさはしいだけの文学的な喜びをおほよそ保證されてゐる。これは大変な便宜と言つて差支へなからう。しかも詞華集といふ文学的道具の効用は、時間の無駄をはぶいて文学的快樂を味はせてくれることに盡きるものではない。といふのは、詞華集とは普通、公共によつて認知された詩を提供する設備であるわけだから、所収の一篇の詩を読み、玩賞することは、その詩に価値を賦与してゐる社会それ自体と結びつくことを意味するのだ。それは單なる文学的教養といふ程度ではなく、もつと深い形で、読者を文明の様式に参加させるだらう。すなはち詞華集とは、詩と社会とをつなぐ精妙な仕掛けにほかならない。

かう考へるならば、『ゴールデン・トレジャリー』がなぜあれほどの成功を収めることがで